

福井縣物産誌（明治 35 年 河田貫三編輯）

一部旧字体は新字体に変更しております

## 一 取引組織の沿革

本縣の機業をして今日の如く旺盛に趣むかしめたるは固より當局者の奨励と奮勉興つて力多し雖も取引組織に漸次改良を加へ取引をして容易ならしめたるも又大に與つて力ありと云わざる可からず現に本縣内に於ても此取引組織なきが故に機業の振はざる所多し丹生敦賀の二郡若狹三郡の如き是なり故に機業の歴史を知らんと欲せば須らく先づ取引組織沿革の一般を知らざる可らず

抑も取引組織の今日の如く稍完全の域に達したるは漸く近年の事にして明治廿年の頃は福井産絹織物の販賣は主として織工會社の一業務として社員之を東京大阪等に持運び販賣を試みたるも羽二重の産額大に増加し販路の擴張に迫られたるを以て小林清作之を職工會社に謀り同年中の製品は専ら同店にて之を賣捌き東京横濱等に販路を開けり同年坪田孫助亦横濱メンデルソン商會等と取引を開始せり

廿二年十月小川喜三郎自ら見本若干を携へて横濱に至り外商に謀る産額未だ僅少にして輸出品となすの価値なきを以て商議纏らず空しく歸途に就く途次京師に入り大野貿易商店に就きて謀るに希望の在る所を以てし商談始めて整い羽二重三百疋を送る故に當時は未だ一定の取引制度あらざりしなり同年田中金七メーソン商會の視察員として始めて来福し廿四年九月同氏改めて出張員として来福す

同年絹織物組長葛巻包蕎福井市内に羽二重市場を開設するの必要を感じ之を當時の仲買商に謀るも数輩の商人其不利を訴へ組合を教唆し説行はれず然りと雖も同志数輩確として動かず策を変じて同盟會社を結び同志者米岡鶴之助を横濱に派し販路を開き而して包蕎の自宅を以て競買場となし組合員斯業者の利益を計り仲買商専横亂賣の途を塞く大に実効あり（或は曰く一六社が競賣場の魁なりと）

次て一六利厚の二社起る而て其他は皆廿五年以後に属す外國商館にしで福井に出張所を設けたるはローゼンソールを以て嚆矢とす同商會は明治十八年工藤金司の名義を以て開業し同年メーソン商會も亦田中金七の名義を以て開業す同年又コーンス商會は眞鍋眞太郎の名義を以て開業し卅三年条約改正後公然商會の名を発表す聞く所によれば現今の取引組織は廿五年田中金七率先して之を作りたる者なりと云う而して羽二重の預手形を渡すの慣例も亦同人の創むる所にして他店之に倣び又希望品銘を仲買の店頭に掲示するの習慣も全く同人の工夫なりと云ふ本縣絹織物組合に絹盛部なる二個の商業部あり絹盛部同盟部は始め部と称せずして會と唱へたり其起源甲は明治廿四年にして皿澤松太郎廣部門太郎の兩人之を發起し羽二重買入商十数名同盟して一の會を起したるなり明治卅一年同業組合法案に拠り絹盛部と改む現今會員三十二名あり乙は明治廿六年の創立にして羽二重仲買商の同盟會なり現今會員一百余名其部と改たるは絹盛部に同じ

生糸會社は明治廿九年に創立したる南越生絲會社を以て嚆矢とす次て福井生糸會社

(後に増資して日本絹絲會社と改む) 起り卅一年越前生絲會社三二年福井生絲會社  
(卅一年の福井生絲會社は全く独立なり) 北陸絹絲、北国絹絲、武生繭絲、北陸生糸  
等輩出し三十三年東洋絹絲會社起り大いに機業家に便利を與ふ今左に生絲會社の創  
設年月日資本額を示さん。

社 名	資 本 総 額 円	設 立 年 月
南 越 生 糸 株 式 會 社	五、〇〇〇〇	明治三十年八月
北 陸 生 糸 株 式 會 社	一二、〇〇〇〇	同三十三年一月
北 國 生 糸 株 式 會 社	一〇、〇〇〇〇	同三十三年六月
福 井 生 糸 委 托 株 式 會 社	二〇、〇〇〇〇	同三十二年十二月
越 前 絹 糸 株 式 會 社	四五、〇〇〇〇	同三十三年五月
岐阜生糸株式會社福井支店	一五、〇〇〇〇	同三十二年六月
北 陸 生 糸 株 式 會 社	一二、〇〇〇〇	同三十二年十二月
日 本 絹 糸 株 式 會 社	一二〇、〇〇〇〇	同三十二年十二月
南越繭糸合資會社福井支店	五〇〇〇	同三十二年七月
合 資 會 社 生 糸 取 扱 所	五、〇〇〇〇	同三十年八月
生 糸 委 托 販 賣 合 資 社	二、〇〇〇〇	同三十二年十月

個人事業として生糸商を営む者の主要なるものは京都の田中平七、松島清八、黒田與  
八、西野源助、松井文助、皿澤松太郎等なり

當市の銀行は多く生糸羽二重を擔保として貸出を為すか又は其荷為替を以て重要な  
業務となすが故に銀行は機業界の金融機関なり故に各生糸會社は自ら其得意とす  
る銀行あり例之ば南越生糸會社の九十一銀行に於る日本絹絲會社の九十二に於ける  
越前生糸の福井若くは五十七銀行に於るが如し

今左に當市各銀行の創立年月及び資本額を示さん

社 名	資 本 総 額 円	設 立 年 月
福 井 縣 農 工 銀 行	五〇、〇〇〇〇	明治三十一年十一月
九 十 一 銀 行	二〇、〇〇〇〇	同十一年十月
株 式 會 社 九 十 二 銀 行	四〇、〇〇〇〇	同三十年七月
株 式 會 社 福 井 貯 金 銀 行	三、〇〇〇〇	同三十八年七月
株式會社五十七銀行福井支店	不詳	同三十二年十二月
株 式 會 社 福 井 銀 行	三〇、〇〇〇〇	同三十三年一月
株式會社百三十銀行福井支店	二三五、〇〇〇〇	同三十八年六月
株式會社十二銀行福井支店	二〇〇、〇〇〇〇	同三十二年十月
大 和 田 銀 行 福 井 支 店	三〇、〇〇〇〇	同二十五年十月

羽二重取引組織は従来多少の変更ありと雖も別に特筆すべき程のことなきを以て爰に現今行はるる組織の一般を録せん

小機業家に於ては其原料を仕入れるに仲買の手を経て其需用する丈を購入すと雖も中等以上の機業者に於ては直ちに生絲販賣店より之を購入す其取引は三十三年頃迄は信用貸行はれたれど同年の大恐慌以来一切現金取引となれり特に本年の火災後は羅災者に対しては一層嚴重となり極めて信用の厚き者に非ざれば更に猶予を為すことなし尙又製造したる羽二重を賣捌くには小機業家若しくは市外機業家にては多く仲買に現金に販賣するも其他の機業家は多く銘々の市場に持寄るか或は直に羽二重問屋に持行き販賣する者なるが問屋は小切手（預り証）を渡して三日後に支払うを例とす従来機業家の仲買に羽二重を賣るや多くは延取引なりしが卅三年の大恐慌後は多く現金取引となりたり又市場に於ても仲買に対し従来専ら延取引を用ひしが近来は現金取引を実行するものあるに至れり。

横濱商館の出張店を設けたるはメーソン、コーンス、ローゼンソールの諸商會が嚆矢にて明治十八年中にあり然れども未だ内地雜居を許されざりしを以て各其番頭の名義を以て開店せり左に各出張所の本商會と番頭と創立年月を左に示す但し各店三十三年条約改正の際本店の名義を發表せり

商 會	名 義	創立年月
メーソン	堀越善十郎（二十六年宮川某に名義に改む）	十八年
ローゼンソール	工藤 金 司	同 年
コーンス	眞鍋 眞太郎	同 年

因みに日くメンデルソン、ストロム、サイモン、堀越の商會は新条約發布以後に属するものなるを以て固より名義なる者なければ表中に加えず

## 二 練白業の沿革

羽二重練白業は明治廿一年の頃は単に従来の染業者に托して不完全なる練白を為すか若くは京都の人上田伊八に托し京都金山練工場に送って練白せしめたりしが同年小川喜三郎等大に之を憂え福井市勝見の染業者渡邊清七なる者を撰んで桐生に遣わし練白を習はしむ是を福井縣練白業の祖となす

爾來渡邊に法を受け斯業を始むる者輩出せり固より當初は不完全の誹を免れざりしと雖も各自苦心焦慮の後終に今日の如く稍完全の域に達し他府縣より練白を依托する者も少からず明治三十一年同業組合法に拠り絹織物組合の一部として練業部を設く又同業者十三名相集まつて練進會なる研究會を起し黒川榮三郎是が會長となり明治廿六年同業者の競尊激烈にして練賃の低落底止する所を知らず爰に於て佐佳枝下町に共同練業株式會社を起したれども故ありて暫くにして解散す練白業の發達進歩として見るべき者は固より技術に関するが故に爰に記述する能はずと雖も屢織物組合事務所に於て練工品評會を催ふし或は練進會に於て技術を研究討議する等は大に斯業の進歩を助けたり練業の進歩と共に練石鹼の需用年に其額を加へたるを以て練石鹼製造を福井市に開く者今現に二戸あり

三十三年度福井縣農商工年報に拠れば本縣練白業左の如し

所在地	練業者	創立年月	職工
福井市	田中 興次兵衛	明治廿二年二月	一五
同	湊 三五郎	同廿二年四月	一五
同	岩城 乾輔	同廿三年二月	一二
同	岡田 三七郎	同廿四年七月	一九
同	黒川 榮次郎	同廿四年	二五
同	上田 伊八	同廿五年	二二
同	伊東 寅次郎	同廿六年	一一
同	川中 嘉太郎	同廿六年九月	一四
同	古市 惣次郎	同三十年六月	一〇
森田村	後藤 庄右衛門	同廿五年七月	一四
粟田部村	稲 平太郎	同廿四年	一〇
鯖江村	清水 勇次郎	同廿五年十二月	一二

以下引き続き掲載予定

機具の沿革